ドクター・ジョンソンのスコットランド旅行

——エディンバラからアバディーンまで——

江　藤　秀　一

はじめに

ジョンソンのスコットランド嫌いは彼の『英語辞典』(1755) の *oat* の定義が一人歩きして，余りにも有名であるが，ボズウェルも述べているとおり，それには悪意はなかった[1]。もし彼が本当に悪意を持って心底からスコットランドを嫌っていて，軽蔑していたとしたら，スコットランドへの旅行などは望まなかっただろう。彼は長年にわたってスコットランドのヘブリディーズの地を訪れることを願っていたのである。実際に"I had desired to visit the Hebrides, or Western Islands of Scotland, so long, that I scarcely remember how the wish was originally excited"[2]と，1773年に行なった旅行記の第1ページに記している。

ジョンソンがスコットランドのヘブリディーズに興味を引かれたのは少年時代にさかのぼる。父のマイケルが彼に Martin Martin の *Description of the Western Islands of Scotland* (1703) を手渡したときのことだった (*Life*, i, 450)。ボズウェルの伝記によると，1763年7月21日，ボズウェルはジョンソンとストランドのタークス・ヘッド亭で夕食を共にし，その席でジョンソンはスコットランド西部諸島を訪ねたいという意向を示したのであった。ボズウェルの知り合いのサー・ジェイムズ・マクドナルドがジョンソンに会いたいとの意向があることを伝えたのがそのきっかけであった (*Life*, i.450)。しかし，旅が実現するのはそれから10年後ということになる。

1773年5月，ボズウェルはヘブリディーズへの旅行を決心するようにジョンソンに手紙を書き，それに答えてジョンソンは7月5日の返事で旅行への期待を表明している。

その後，ボズウェルは再度手紙を書いて，8月12日に高等民事裁判所が休会になることを報じ，なるべくその日よりも前にジョンソンに会いたいと述べ，改めてヘブリディーズの旅へ誘った。それに対してジョンソンは8月3日付け

の手紙で，8月6日にロンドンを立つ予定であることを述べている。その後，ジョンソンは8月11日にはニューカースルから手紙を書いて，

「拝啓，昨夜ここに到着，必ずとは約束できませんが，土曜日にはエディンバラ入りしたいと思います」

と述べて，エディンバラ入りが近いことを伝えた（*Life*, ii, 266）。

結局ジョンソンは8月14日にベリック・アポン・トウィー経由でエディンバラ入りした。二人はボズウェルの召使でボヘミア人のジョゼフ・リッターを伴って，8月18日にエディンバラから東海岸を北上して約3ヶ月に及ぶ旅を行った。

旅を終えたジョンソンは11月22日にロンドンへの帰路についた。それから約7ヵ月後の1774年，ジョンソンはその時の旅行記の原稿をウィリアム・ストローンに渡した。ジョンソンは筆の早いことで有名であるが，この旅行記もわずか20日足らずで書かれた[3]。

ジョンソンはこの旅行記の構想をハイランドを通過中に思いつく。そのときのことを次のように述べている。

I sat down on a bank, such as a writer of romance might have delighted to feign. I had indeed no trees to whisper over my head, but a clear rivulet streamed at my feet. The day was calm, the sir soft, and all was rudeness, silence, and solitude. Before me, and on either side, were high hills, which by hindering the eye from ranging, forced the mind to find entertainment for itself. Whether I spent the hour well I know not; for here I first conceived the thought of this narration.(*Journey*, 40)

1774年12月，*A Journey to the Western Islands of Scotland* は刷り上り，国王ジョージ三世とスレイル夫人に贈呈されたが，実際に公刊されたのは翌年の1月になってからのことである。売価は5シリングで初版2千部であったが，初版印刷中にもう2千の増刷が決められた。ジョンソンはこれによって200ギニーを受け取った。評判は上々であった。

この旅行記は道中のこまごました日々の出来事はあまり述べられていない。

「この本はジョンソンの後年の著作物の主流をなすものであり，ジョンソンを称賛するものは何度も繰り返して読むべき本である」とジョン・ウェインは述べ[4]，グリーンは「一流の心の持ち主の記録であり，彼自身と彼の読者にとって新しい生活様式を真面目に正確に報告している」[5]と述べている。

かつてジョンソンは旅行記について「旅行者の書いたものほど読者を失望させるものはないだろう」と述べたことがある[6]。ではジョンソン自身はこの旅行記で何をどう述べようとしたのか，また「後年の著作の主流」と評される特徴は何なのかを *A Journey to the Western Islands of Scotland* のエディンバラからアバディーン到着までの最初の5日間を追いながら，ボズウェルの *Tour to the Hebrides* も参照しながら求めてみることにした。

エディンバラ — セント・アンドルーズ

この日の *Edinburgh Evening Courant* はジョンソンとボズウェルがボヘミア人の召使のジョゼフを伴って，スカイ島のアレクサンダー・マクドナルド氏を訪ねる旅に出たことを報じた[7]。

エディンバラを立った一行はリースからフォース湾を船で渡るが，その湾に浮かぶ小島のキースに興味を引かれて，そこを探索する。ジョンソンはキースについて，植生についてはアザミが繁茂しているということ，修復の可能な城砦の跡があったこと，「女王マリア1564年」と刻まれた石があったこと，などを記している。そして，この城跡については少数の兵士の避難場所ではなかったかと推測している（*Journey*, 3)。ボズウェルによるとジョンソンは「女王マリア」と刻まれた石に大変興味を持ったということである[8]。

ジョンソンはこの島がロンドンから同じくらいの距離にあれば，大金を使って島は開拓され，引き立つようになることだろうと述べているが（*Journey*, 4)，ボズウェルはジョンソンが "I'd have this land. I'd build a house, make a good landing place, have a garden, and vines, and all sorts of trees." (*Tour*, 56) と述べたことを記しているところから，ジョンソンがこの島に魅力を感じたことは間違いない。この島は "nothing more than a rock covered with a thin layer of earth, not wholly bare of grass, and very fertile of thistles" (*Journey*, 3)と述べているが，樹木がないということはジョンソンには大変不満らしくて，旅を続ける中で，樹木の様子については度々言及されることになる。

見学を終えた一行の乗った船が着いたキングホーンには馬車が待っており，一行は馬車でクーパーを経由して，セント・アンドルーズに夜遅く到着する。

途中の道では旅人にはほとんど会うこともなく，また，途中で通行料金所に邪魔されることなく気持ち良く旅を進めることができたことをジョンソンは記している。

ジョンソンは道路状況にも興味を示しており，道路の整備の仕方についても，行く先々で言及している。ここでも，"The roads are neither rough nor dirty; ...Where the bottom is rocky, as it seems commonly to be in Scotland, a smooth way is made indeed with great labour..." (*Journey*,4) と述べている[9]。

最初の宿泊地はセント・アンドルーズであった。ジョンソンにとってはこの古い大聖堂と大学の町は失望の町であった。

セント・アンドルーズに夜遅く到着した一行はグラス・インで食事を済ませ，当地のロバート・ワトソンという論理学や修辞学などを専門とするユナイテッド・コレッジの教授の家に留めてもらう。この夜から20日の昼頃まで同教授宅に滞在し，セント・アンドルーズの町を見学する。ジョンソンは多くの人に親切にしてもらうが，この町を去るに当って，この町の大学と教会の荒廃を嘆き，次のように苦言を呈する。

> The kindness of the professors did not contribute to abate the uneasy remembrance of an university declining, a college alienated, and a church profaned and hastening to the ground. (*Journey*, 9)

この地における記述を通して，ジョンソンは長老派の教会がいかに宗教心を堕落させ，また大学を堕落させたかを語っている。

The city of St. Andrews, when it had lost its archiepiscopal preeminence, gradually decayed : One of its street is now lost ; and in those that remain, there is the silence and solitude of inactive indigence and gloomy depopulation. (*Journey*, 6)

英国国教会の教義と規律を信奉するジョンソンとしては[10]，ノックスらの宗教改革は我慢ならなかったことであろう。町が衰退するのも，大学の学生数が

増えないのも司教の教会がないからだと述べている。

廃墟と化した大聖堂を見学して，

...even the ruins cannot be long be visible, unless some care be taken to preserve them (*Journey*, 5)

と述べて，保存の必要性を訴えているものの，それに続けて，"...and where is the pleasure of preserving such mournful memorials?"と，その困難なことに理解も示している。

それでも，このように古座大司教の権威にふさわしい建物を廃墟となるがままにしておくスコットランド人にはジョンソンは我慢がならなかったようである。従って，過去において熱心に宗教の改革を支持した人たちが今ではイングランドとの交流によってその情熱をそがれてしまったと強く非難し，彼らについて，"a people whom idleness resigned to their own thoughts, and who conversing only with each other, suffered no dilution of their zeal from the gradual influx of new opinions" (*Journey*, 6)と，その怠惰振りと偏狭さを糾弾している。だから，"St. Andrews indeed has formerly suffered more atrocious ravages and more extensive destruction, but recent evils affect with greater force." (*Journey*, 9)とこの項の締めくくりで述べることになる。

ジョンソンは大学の衰退も嘆いている。ジョンソンが訪ねる数年前まではこの町にはセント・サルヴェイター，セント・レナド，セント・メアリの3つのコレッジがあったが，1747年には最初の二つの収入が十分ではなく，またセント・レナドの建物は改修が不可能となっており，ジョンソンが訪ねたときにはセント・レナドの建物を売却して，セント・サルヴェイターとセント・レナドは合併し，町のコレッジは2つになっていた (*Journey*, 6)[11]。ここでジョンソンは商業の繁栄と大学の関係について重要な意見を述べている。

It is surely not without just reproach, that a nation, of which the commerce is hourly extending, and the wealth encreasing, denies any participation of its prosperity to its literary societies ; and while its merchants or its nobles are raising palaces, suffers its universities to moulder into dust. (*Journey*, 7)

大学の衰退を見るのはジョンソンには実に忍びなかったようで，セント・アンドルーズの記録を閉じるに当って,「もし大学が200年前に破壊されていたら，私たちはそれを悲しみはしなかっただろう。しかし，大学が衰退を嘆き，生き延びようと奮闘しているのを目の当たりに見るのは，心を物悲しい印象と甲斐なき願いで満たしてしまうものだ」(*Journey*, 9) と述べている。

そしてまた，セント・アンドルーズでの記録にはジョンソンのイングランド人としての誇りも表われている。それは，セント・メアリ・コレッジにその頃建てられた図書館を案内したジェイムズ・ミュリソン博士が「イングランドにはこのような立派な図書館はない」と述べたときのことであった。ジョンソンはその件を "The doctor...hoped to irritate or subdue my English vanity" (*Journey*, 7)と記しているが，プライドを傷つけられたことは間違いない。

ジョンソンはこのスコットランドで最も古い大学を擁する町を見学することを首を長くして待ち望んでいたようである[12]。そしてベイトも指摘しているように[13]，この旅行の最初の訪問地の衰退振りはジョンソンにはとてもショッキングであり，過疎化の問題は後のスカイ島での移民に関する見解の記述にも見られるように，この旅行中の主要なテーマとなるのである[14]。

セント・アンドルーズ — モントローズ

20日の正午頃,一行はセント・アンドルーズを出発し,渡し舟でテイ湾を渡って，モントローズへ向う。ジョンソンの旅行記ではアーバブロシックという見出しがついているが，ジョンソンはそのはじめの方で，スコットランドの道路と樹木についての考察を行う。この記述はセント・アンドルーズの教会や大学の荒廃を批判したことと併せて，一部のスコットランド人の怒りを買うこととなった[15]。

ジョンソンは述べる，

The roads of Scotland afford little diversion to the traveller, who seldom sees himself either encounters or overtaken, and who has nothing to contemplate but grounds that have no visible boundaries, or are separated by walls of loose stone. (*Journey*, 9)

そして，この地には樹木がないことを指摘して，次のように述べる。

From the bank of the Tweed to St. Andrews I had never seen a single tree, which I did not believe to have grown up far within the present century. A tree might be a show in Scotland as a horse in Venice. (*Journey*, 9-10.)[16]

森林の消滅は人口増加と技術の導入により，建築と耕作が普及し，いたるところで生じている現象であると認めた上で，"But I believe few regions have been denuded like this, where many centuries must have passed in waste without the least thought of future supply." (*Journey*, 10)と，ジョンソンはスコットランド人の無計画さを責める。

こういう記述がドナルド・マクニコルを怒らせたのか，マクニコルに，「ロンドンの弱々しい老人にはこの時期の旅行は理に叶ってない。多くの旅行者は夏を選んでいる。そうすればこの国の多くの素晴らしいところを目にすることができるのに」と，やけっぱち気味にジョンソンはその旅行の時期を非難されることとなったのである[17]。

ジョンソンは貨幣価値の違いにも興味を示していたことがうかがわれる。テイ湾の渡し舟の費用が4シリングであったことを記しているが，セント・アンドルーズでは学生の生活費が一番上の階級で年に15ポンド，低い身分であれば10ポンドで過ごすことができることを述べている。

テイ湾を渡った一行はダンディーに立ち寄るものの，ジョンソンは"We stopped a while at Dundee, where I remember nothing remarkable" (*Journey* 11)と述べている。

しかし，次に立ち寄ったアーブロウスはとても気に入ったようで，"I should scarcely have regretted my journey, had it afforded nothing more than the sight of Aberbrothick" (*Journey* 11)と述べている。ここにはかつてスコットランドの歴史上重要な大修道院（abbey）があり，ジョンソンらは廃墟となったその修道院跡を訪れ，その壮大さに感服したのであった。その修道院は1178年にスコットランド国王であったウィリアム（William the Lion）によって設立され，トマス・ベケットへ献じられたものであった。1320年，この修道院でスコットランド議会によって「アーブロウスの宣言」がなされ，ロバート・ブルースが独立国家としてのスコットランドの国王であるということがローマ教皇に報告されたのであった[18]。

この廃墟に満足して一行はモントロウズに足を進め，夜の11時頃に当地に到

着し，シップ・インという宿に宿泊する。ジョンソンはこの宿について，"we did not find a reception such as we thought proportionate to the commercial opulence of the place." (*Journey*, 12) と述べ，またボズウェルは "We found but a sorry inn" (*Tour*, 72.)と述べており，二人にとっては満足の行く宿屋ではなかったようである。しかし，ジョンソンのイングランドびいきが改めて浮きぼりになる出来事が起こる。給仕が砂糖を手づかみにして，ジョンソンのレモネードに入れたのであった。ジョンソンは怒って，この給仕を「悪たれ！」(rascal！) と呼んだ。しかし，ボズウェルはその宿の主人がイングランド人であることを示唆した。ボズウェルは "It put me in great glee that our landlord was an Englishman. I rallied the Doctor upon this, and he grew quiet." (*Tour*, 72)と，その意図を述べているが，彼のねらいは的中し，ジョンソン自身述べているように，彼はそれ以後はできるだけ宿の主人を弁護したのであった[19]。

しかし，この日のジョンソンの記録でもっと大切なことは乞食に関する感想であろう。ジョンソンはスコットランドの乞食の存在をロンドンにいるときには聞いたことがなかったと述べている。18世紀にあってはジョンソン自身も述べているように，スコットランドは一般の人には未知の国であった[20]。ジョンソンはスコットランドにはたくさん乞食が入ることを指摘して，次のように述べる。

In Edinburgh the proportion is, I think, not less than in London, and in the smaller places it is far greater than in English towns of the same extent. (*Journey*, 12)

そして，イングランドとスコットランドの乞食の態度の違いについて，

It must, however, be allowed that they are not importunate, nor clamorous. They solicit silently, or very modestly, and therefore though their behaviour may strike with more force the heart of a stranger, they are certainly in danger of missing attention of their countrymen. (*Journey*, 12)

と述べ，次のような有名な結論を導き出す。

Novelty has always some power, an unaccustomed mode of begging excites an unaccustomed degree of pity. But the force of novelty is by its own nature soon at an end ; the efficacy of outcry and perseverance is permanent and certain. (*Journey*, 12)

この記述から三つのことを我々は知ることとなる。一つは小さな町ではスコットランドのほうが乞食がたくさんいたということ，そしてもう一つは，イングランドの乞食の物乞いのしつこさである。あわせて，ある観察から何かを導き出すというジョンソンの帰納的推理法もうかがわれ，この考え方は辞書作りで大いに力を発揮したものであった。

モントローズの町自体についての記述はきわめて短い。そこは "well built, airy, and clean" (*Journey*, 12)であったと述べ，そして当地で驚いたことは，イングランド教会の礼拝堂がほかの地域のどこのよりも清潔で，オルガンがあった，ということだけである。

モントローズ — アバディーン

一行はここでモントローズを出発して，ロレンスカークへ立ち寄る。ジョンソンの記録には何も書かれてないが，ボズウェルはこの地について，"The village seemed to be irregularly built, some of the houses being of clay, some of brick, and some of brick and stone."と述べ，あわせて，"Dr. Johnson observed, they thatched well here"というジョンソンの意見を記録している (*Tour*, 75)。

ボスウェルここでは召使のジョゼフを法律家であるモンボドー卿ジェイムズ・バーネット宅へ走らせて，ジョンソンとの対面を計った。このモンボドーは法学者にして哲学者でもあり，原始主義 (primitivism) を信じていた。ジョンソンはボズウェルも述べているとおり，「常に文明人の方が非文明人よりも優れているという見解を保持して」おり (*Tour*, 125)，この二人の面会は激しい議論を引き起こす可能性があった。実際に，原始主義に関することでは幾分かの議論を引き起こし，その後もジョンソンは「旅行中はもちろんのこと，帰ってからもずっとモンボドーをさげすむような批評を繰り返している。」[21]。しかし，ジョンソンはこの折のことを "The magnetism of his (Boswell) conversation easily drew us out of our way, and the entertainment which we

received would have been a sufficient recompence for a much greater deviation" (*Journey*, 12)と，慎重を期して短く失礼にならないように述べている[22]。

ボズウェルの記録から

このモンボドー宅の訪問の詳細についてはボズウェルが書き残している。それによるとモンボドーの自宅は "a wretched place, wild and naked, with a poor old house" (*Tour*, 77)と書かれているように，立派な邸宅ではなかったようである。しかし，モンボドーはきわめて礼をつくして二人を迎え入れた。そして，屋敷に掲げてあるダグラスの紋章を指差して，彼の曾祖母がダグラス家の出身であることを述べて，"In such houses our ancestors lived, who were better men than we" (*Tour*, 77)と自説を述べたところ，ジョンソンにたちまち反駁される。"No, no, my lord. We are as strong as they, and a great deal wiser." (*Tour*, 77)。この展開にボズウェルは早速激論が始まるのかと恐れるのであるが，しかし，モンボドーは「古来からの礼儀正しさ」で名高い人物だけあって，取り合わなかった。

ここではジョンソンのアメリカへの移民に関する貴重な意見を聞くことになる。それは "a man of any intellectual enjoyment will not easily go and immerse himself and his posterity for ages in barbarism" (*Tour*, 78)といものであり，このことからジョンソンはアメリカがまだ野蛮な地域であると考えていたことが分かる。ジョンソンは移民に対しては否定的な見方を取っていた。ジョンソンには移民は人間の幸福にとって有害であると思われたのである。国の防衛力を弱め，生活の快適さを減少させるというのがその理由であった (*Tour*, 27)。ジョンソンらがスコットランド旅行中の1773年ごろ，スコットランドの高地地方からアメリカへたくさんの人々が移り住んでいた。アメリカへの移民については，スカイ島のオスティングでも移民熱を目の当たりにして，社会の解体を促すものと嘆いている。ジョンソンは述べる，"To hinder insurrection, by driving away the people, and to govern peaceably, by having no subjects, is an expedient that argues no great profundity of politics....it affords a legislator little self-applause to consider, that where there was formerly an insurrection, there is now a wilderness." (*Journey*, 97)

原始主義とアメリカの移民についてはジョンソンはモンボドーとは意見を異

にしたが，ホメロスについては両者ともその文学性を高くかっており，意見が一致する。その会話の中で，"The history of manners is the most valuable. I never set a high value on any other history."というモンボドーの意見に対して，ジョンソンは"Nor I; and therefore I esteem biography, as giving us what comes near to ourselves, what we can turn to use." (*Tour*, 79)と述べて，ジョンソンの伝記についてのいつもの評価をここでも表明している。そして，この意見の一致についてボズウェルは"Bravo! Thought I; they agree like two brothers." (*Tour*, 80)と喜び，"I am sorry, Dr. Johnson, you were no longer at Edinburgh, to receive the homage of our men of learning." (*Tour*, 80)というモンボドーの言葉と，"My lord, I received great respect and great kindness." (*Tour*, 80)というジョンソンの返答を記している。その後，イングランドとスコットランドの学問の実態に関する議論やモンボドーの息子のラテン語の力を試すジョンソンのことを述べた後でも"My lord was extremely hospitable, and I saw both Dr. Johnson and him liking each other better every hour."((*Tour*, 81)と，その二人の仲の良さを強調している。このことは逆にボズウェルの二人への気の使いようがいかに大きかったかがうかがわれる。ボズウェルはこの二人には敵にはなって欲しくないのである。それがこのような形となって現れたのであろう。というのも，ジョンソンのモンボドーに対する強い軽蔑をボズウェルは十分に知っていたのである。

このモンボドー宅での息子に対するラテン語での質問は我々に貴重な意見を与えてくれる。というのも，その満足な返答振りに対してジョンソンは，"Get you gone! When King James comes back, you shall be in the 'Muses' Welcome!" (*Tour*, 81) と述べているのである。この言葉の言わんとしていることは，G．H．トピック (G.H.Oittock) によれば，ジェイムズ国王がもどってきたときだけモンドボーの息子にふさわしい学問を回復できるということである。つまりジャコバイトの政策である司教制度の回復へのジョンソンの支持が表れているわけである[23]。そしてスコットランドの荒廃は長老制にあるというジョンソンの見解は今後も述べられていくことになる。

この日の面会をボズウェルは成功裏に終わったことを更に印象付けようと記述を続ける。それはモンボドーの召使とジョンソンの召使の双方が黒人であるという偶然の一致であった。このようなことまで持ち出して，ボズウェルはこの面会の成功を印象付けようとしているのである。

一行は宿泊を促すモンボドーの誘いを断り，アバディーンへ足を進める。彼

らを本通りまで送り届けたモンボドーの召使のゴーリーに対して，ジョンソンは "Are you baptized?" (*Tour*, 83)と質問し，ダラムの司教によって洗礼を受けたことを告げられ，彼に1シリングを渡す。ここにもジョンソンのイングランドびいきが感じられるエピソードである。

一行がアバディーンへ到着したのは夜も11時半になっていた。

エディンバラからの道についてジョンソンが，"The roads beyond Edinburgh, as they are less frequented, must be expected to grow gradually rougher ; but they were hitherto by no means incommodious."(*Journey*, 12)と記しているところから，アバディーンまでの道は18世紀にあってイングランド人のジョンソンにも不自由を感じさせないほどに整備されていたことがうかがわれる。もっともこの方面の往来はほとんどなかったようで，先の一節に加えて，"The night and the day are equally solitary and equally safe ; for where there are so few travellers, why should there be robbers." (*Journey*, 13)と，いかに往来が少ないか，またそのために危険も感じないですんだかを述べている。

アバディーンでの一行の宿泊所はニュー・インであったが，そこはあいにく満員であった。ジョンソンによれば中に入れてもらうのに苦労したようである。しかし，「やっとボズウェル氏が身分を明かしたところ，すべての問題は解決し」(*Journey*, 13)，二人は良い待遇と丁寧なもてなしを受けることとなった。

ボズウェルが述べるところでは，ヘンリー・スレイルからのボズウェル宛の手紙がこの宿気付で届いており，給仕の一人が二人のうちのどちらかがボズウェルではないかと尋ねたのである。こうしてボズウェルの正体が分かったわけであるが，二人が良い待遇を得たのはボズウェル自身の功績ではなく，その父の功績であった。ボズウェルの父であるアレクサンダー・ボズウェルは裁判官から判事になった人物で，巡回裁判中にはニュー・インを常宿としていたのであった。ボズウェルは「お父様とあなた様がそっくりなので，あなた様のことが分かりました」(*Tour*, 84) と給仕から強いアバディンシャー訛でお世辞を言われたのであった。結局この夜二人は，2つのベッドがある部屋をあてがわれたのであるが，当時のはたごでは，「非常に上等な宿屋でさえ相部屋になるのは普通で，多くの場合，ベッドも見ず知らずの人と共にした」[24]というのであるから，混んだニュー・インでの二人の処遇は破格のものであったといえるだろう。

まとめ

ジョンソンの*A Journey to the Western Islands of Scotland* は全部で90日に及ぶ旅の記録であるが，その最初の部分をながめてみると，それは単なる景色や名所旧跡の案内ではなく，その名所旧跡を訪れたジョンソンの観察と感想といった内容になっており，なかでも重要なのはジョンソンの思想の現れとなっていることである。もちろん，乞食の実態や樹木のなさへの言及といった表面的なものも含まれているが，乞食の現状についても，そこから，「目新し」ということについてのジョンソンの所見が述べられる。旅の行く先々で観察したことから所見を述べるというジョンソンの記述法はジョンソンの基本的な考え方である。ジョンソンは言う，

...life consists not of a series of illustrious actions, or elegant enjoyments ; the greater part of our time passes in compliance with necessities, in the performance of daily duties, in the removal of small inconveniences, in the procurement of petty pleasures...The true state of every nation is the state of common life. (*Journey*, 22)

国を構成している一般庶民の生活のありようを仔細に観察することにより，その国の真の状態を探ろうとするこのような論理の組立て方がジョンソンの生き方や考え方の基本であったと言える。

今回取り上げたのはジョンソンが旅をはじめたわずか1週間の記録であるが，それでもセント・アンドルーズとアーブロウスでは教会を見学しているところから，スコットランドにおける教会の状況にジョンソンが関心を示していたことをうかがい知ることができるし，スコットランドの宗教改革はジョンソンには面白くない事実，いやスコットランドの町の繁栄を脅かした原因であると考えていることも分かる。

また，学問に対する厳しい態度と学問が国の発展にとって重要な項目であるということをジョンソンが強く信じていることも，セント・アンドルーズの記述から知ることができる。

モンボドー卿との面会については，ジョンソンの旅行記の中での記述は少ないが，ボズウェルの旅行記がその補いとなっており，『ジョンソン伝』での記述とあわせて考察する必要がある。というのも，原始主義や啓蒙運動といった

時代の流れの中にあって，反原始主義的立場が明らかになり，啓蒙主義運動に対するジョンソンの複雑なかかわりを見る一場面となるからである。ジョンソンの考えるおもしろい旅行記とは，旅行者が旅先の名所旧跡を通して述べるその所見にあるようである。

注

1．ボズウェルは，"Dr. Johnson was often accused of prejudices, nay, antipathy, with regard to the natives of Scotland. Surely, so liberal a prejudice never entered his mind."と述べ，ジョンソンは多くのスコットランド出身の人々を敬愛し，また世話をしてきたことを述べている。James Boswell, *The Life of Samuel Johnson*, ed. G. B. Hill ; rev. L. F. Powell, 6 vols. (Oxford : Clarendon, 1934-1950), ii. p. 121. 以後の引用はすべてこの版に基づき，本文中に *Life* としてページ数を記す。

2．Samuel Johnson, *A Journey to the Western Islands of Scotland,* ed. Mary Lascelles in 1971 in *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, (New Haven : Yale University Press, 1958-), p.3。以後の引用はすべてこの版に基づき，本文中に *Journey* としてページ数を記す。

3．パット・ロジャーズ.『ジョンソン百科事典』永嶋大典監訳,(ゆまに書房, 1999), p.127.

4．John Wain, *Samuel Johnson*, (New York : The Viking Press, 1975), p. 321.

5．Donald Greene, Samuel Johnson, (Boston : Twayne Publishers, 1989), p. 131.

6．*The Idler* 97号での旅行記についての論考で述べている。Samuel Johnson, *The Idler and The Adventurer* ed. W. J. Bate, John M. Bullitt and L. F. Powell in the second volume of *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, (New Haven : Yale University Press, 1958-), p. 298

7．Virginia Maclean, *Much Entertainment, A visual and Culinary Record of Johnson and Boswell's Tour of Scotland in 1773*, (New York : Liveright, 1973), p.5.

8．James Boswell, *Tour to the Hebrides*, in the fifth volume of *The Life of Samuel Johnson*, ed. G. B. Hill ; rev. L. F. Powell, 6 vols. (Oxford : Clarendon, 1934-1950), p. 55. 以後の引用はすべてこの版に基づき，本文中に Tour としてページ数を記す。

9．これについては1745年のジャコバイトの反乱を鎮めるために兵站の問題が生じ，道路改良の必要性が強調された結果のようである（R. B.シュワーツ『18世紀ロンドンの日常生活』玉井東助，江藤秀一訳，（研究社出版，1990），p.162)。

10. John Hawkins T*he Life of Samuel Johnson*, *LL. D.* (1787), edited and abridged by Bertram Davis, (New York : Macmillan, 1961), p.70.

11. *Journey*, p. 6 の脚注に詳しく説明が出ている。

12. Walter Jackson Bate, *Samuel Johnson*, 1975, (rpt. The Hogarth Press, 1984), p.

465.

13. 同上。

14. この点については Dobald Green, p. 132, John Wain, p.334を参照。

15. 『ジョンソン百科』p.210, 特に Donald McNicol は "Every line is marked with prejudice ; and every sentence teems with the most illiberal invectives." (James T Boulton ed., *Johnson The Critical Heritage*, London : Routled & Kegan Paul, 1971, p.249)と手厳しい。

16. この件についてはボズウェルはジョンソン伝の中で次のように後日談を記している。

He also preserved in his wild allegation, that he questioned if there was a tree between Edinburgh and the English border older than himself. I assured him he was mistaken, and suggested that the proper punishment would be that he should receive a stripe at every tree above a hundred years old, that was found within that space. He laughed, and said, 'I believe I might submit to it foe a *baubee*!' (*Life*, ii, 311)

また，これより先の1769年のこと，ボスウェルがイングランドはスコットランドの優秀な造園師の恩恵を被っていることを述べたとき，ジョンソンは次のように述べた。

Sir, that is because gardening is much more necessary amongst you than with us, which makes so many of your people learn it. It is *all* gardening with you. Things which grow wild here, must be cultivated with great care in Scotland. Pray now, (throwing himself back in his chair, and laughing,) are you ever able to bring the *sloe* to perfection? (*Life*, ii, 77-78)

さらにはそれよりも少し前には" Sir, you have desart enough in Scotland." (*Life*, ii, 75)とも述べており，ジョンソンはスコットランドの森林に関する情報を何らかの形で得ていたものと思われる。

17. *Critical Heritage*, p.245.

18. Bamber Gascoigne, *Encyclopedia of Britain*, (London : Macmillan, 1994), pp.28-29.

19. " I then defended his (= the landlord) as well as I could" (*Journey*, 12)。ジョンソンは後の1775年７月にスレイル夫人とフランス旅行をした折にも似たような経験をする。Madame de Bocages の家でコーヒーをご馳走になったときのことであるが，給仕をした召使が砂糖を手でつまんでコーヒーに入れたのであった(*Life*, ii, 403)。また，８月14日この旅行のためにエディンバラのボイド・イン（Boyd's inn）に落ち着いたときにも，給仕が脂ぎった指で砂糖をレモネードに入れたために，そのレモネードの入ったグラスを窓から投げ捨てたことがあった。ジョンソンは迎えに来たボスウェルに "a bad specimen of Scottish cleanliness"を見せていただいたと述べている（*Tour*, 21)。

20. ジョンソンは，「自国のことをあたかも新しく発見された海岸に打ち上げられた人であるかのように地理的な描写をするのは愚かである」と断りながらも，「スコットラン

ドに関するこの著作を読む人にとってはスコットランドはほとんどと言っていいほど知られていない」と述べている。(*Journey*, 13参照。)

21.『ジョンソン百科事典』p. 156.

22.『ジョンソン百科事典』p. 156.

23. Murray G.H.Pittock, 'Johnson and Scotland' in *Samuel Johnson in Historical Context* edited by Jonathan Clark and Howard Erskine-Hill(New York : Palgrave,2002), p.190.

24. シュワーツ, p.169.